序　論
東北アジアにおける人の移動と共生、そして国家

岡　洋樹

問題の所在

現代は「グローバリゼーション」の時代だといわれる。伊豫谷登士翁は、「経済のレベルでは、グローバリゼーションは国家の規制を超えるさまざまな経済活動として現れる」一方、「政治においては、帝国主義あるいは国家間関係に代わる権力あるいは権威が問題となる」のであり、「国民国家を単位としてきた国際政治のあり方が崩れ、新たな越境的政治主体が現れることになる」のだと言う［伊豫谷登士翁 2001：6-7］。北東アジアの国境を越える移動を論じた赤羽恒雄とアンナ・ワシリエバは、過渡期を迎えている北東アジアでは、「国境内および国境を越えた移民やその他の人流が重要な影響力を及ぼすようになっている」という認識に立ち、「国際関係に対する国家中心的な取り組み方や見方では、もはやこの新たな現実の論理や形態を説明することはできない」と断じている［赤羽恒雄、アンナ・ワシリエバ 2006：13］。しかし人の移動の問題を考える時、「国家中心的な取り組み」が無効だとしても、少なくとも東北アジアでは、国家を無視した取り組みは明らかに早計である。グローバルな人と物の移動に対する国家の敷居が下がったとはいえ、国家はなおも健在である。それゆえグローバリゼーションをめぐる議論は、近代を特徴づける「想像の共同体」としての国民国家が設定する「境界」を越えることによる緊張を常に意識せざるをえない。それは移動そのものへの関心というより以上に、人の移動が国家統治との間に生み出す緊張やホスト社会における移民集団の疎外された境遇への関心なのである。出稼ぎ労働などの越境移動は、国家内部に異質な人間集団を挿入する。国家はそれを「国民」から差

別化し、「国家」内部に分断と対立が生まれ、「国民」のナショナリズムを刺激する。しかし伊豫谷は、「グローバルな課題として人の移動を問うということは、固定したと考えられてきた場のゆらぎから人の移動を問い直すこと」で、「移動から場所を問い直すこと」だという［伊豫谷登士翁 2007：3-4］。つまり「ゆらぎ」を定常的な事態として正面から検討するべきだというのである。たしかに移民のような越境的な事象は、国家統治の枠組に「ゆらぎ」をもたらすものと考えられる。ただいかなる時代においても、「ゆらぎ」のない完璧な国家統治を想定することは難しいだろう。グローバル化が進む近年にあっても、ホスト社会ばかりでなく、移民社会にもナショナルな感情は見いだされるし、アイデンティティーの「ゆらぎ」もしかりである。このような人の越境移動とその結果としての国家統治とアイデンティティーの「ゆらぎ」は、文化的多様性・異文化理解に関わる研究として、歴史学・経済学・文化人類学・政治学・社会学・文化研究などさまざまな分野で膨大な研究蓄積を生み出している。そして移民をめぐる議論のほとんどは、明示的であるかどうかはともかくとしても、ディアスポラ研究などで見られるように、大なり小なり国家統治との関係で、あるいは国家を強く意識して立てられている［赤尾光春・早尾貴紀編 2009］。移民研究において国家は依然として課題の中心にある。

本書は、人の越境移動と国家統治の諸側面を、東北アジアの内陸辺境を対象として考察しようとする。ここで東北アジア辺境と呼ぶのは、中国（とくにその北部・東北部）、ロシア（とくにそのシベリア・極東）、モンゴル、北朝鮮を含む地域である。東北アジア地域に関心が向けられるようになったのは、1980年代から1990年代にかけて生じた地政学上の変化、とりわけ冷戦構造の解体がもたらした変化に起因している［岡洋樹，境田清隆，佐々木史郎編 2009］。冷戦体制下の東北アジア（この文脈では「北東アジア」と呼ばれることが多い）は、朝鮮半島における南北の分断と、社会主義体制をもつソ連・中国と、アメリカのヘゲモニーの下でこれと対峙した日本・韓国・台湾との対立構造

によって形成されたフォルトラインをめぐる地域概念であった。冷戦の終結は、東北アジアの地域概念の意味と内容を根底から変えた。国家間関係を遮断するイデオロギー的な対立線は消滅し、域内の政治・経済・文化の交流がはじまった。とくに中国の経済的発展が、東アジアに巨大な経済圏を出現させた。中ソの対立も解消され、ソ連を引き継いだロシアやソ連の衛星国だったモンゴルは、かつての「西側」との関係を深めた。その結果、政治的対立線を挟む狭い空間を指す地域概念としての北東アジアは、国境を越えた人と物の移動の舞台として、より広い空間をさす地域概念へ再定義された［宇野重昭、増田祐司編 2000］。東北アジア研究（あるいは北東アジア研究）とは、多分に国家の敷居が低まり、敵対から友好へ向かう中で、日本海沿岸諸国の経済協力が進むのではないかという期待の表明だったように思われる［宇野重昭、増田祐司編 2002b］［宇野重昭、小林博編 2009］。しかしこの地域では、依然として国家の影は大きい。つまり本書は、このようなポスト冷戦期における東北アジアを地域的枠組みとして、依然として強い拘束力をもつ国家を意識しながら人の移動を歴史的・現在的に考えようとする試みである。

本研究が着目するこの地域の第一の特徴は、広い国土を有する中露両大国の統治である。17 世紀に形成されたこの政治地図は、20 世紀に大方の帝国統治が、より小規模な国民国家へと解体したほかの地域とは異なり、なおも維持され、かつ政治的に安定している。またその広域性に伴う文化的多様性から、この地域では国境を越えた移動ばかりでなく、文化的な越境を伴う国内移動も重要な論点となる。杉原薫は、アジアにおける移動について、「大西洋移民と比べるのではなく、ヨーロッパ内部での労働力移動と比較すべき性格のもののようにも見える」と指摘し、「ヨーロッパ内、インド国内、中国国内の移動」は「通常の感覚で国際移動に当たるレベルで比較すれば、二つの流れはおそらくほぼ同等の規模だったのではないか」と論じている［杉原薫 1999：36-39］。この発言は大国による広域統治を特徴とする東北アジア

によくあてはまる。この地域における中国やロシアの広域性は、それぞれの国内における人の長距離移動とこれに伴う多様な文化の接触・衝突をいやおうなく含むことになる。

第二は、東北アジアの辺境性と人の移動をオーケストレイトする国家の関与である。本書に収められたサヴェリエフ論文や、広川論文に端的に示されるように、東北アジアでは、国家が人の移動を自ら組織した。ロシアではシベリア、極東の開発と人口増加を確保するために、政府が移民政策を推進した。その政策の対象になったのは、自国民だけではなく、国外からの移民も含まれた［サヴェリエフ 2005］。またソ連時代には囚人労働や強制移住が繰り返された。シベリアや極東では、人口の希薄さにとどまらず、場合によってはヨーロッパ＝ロシアへの住民の流出に悩まされることになり、国の政策的な関与は必須だった。一方中国では、清の時代に清朝政府が東三省への農業労働力の確保のために内地からの漢人移住を政策的に実施したが、東三省側の労働力受容は、清朝の想定を越えた山東省からの人の流入を促進した［荒武達朗 2008］。本書では取り上げないが、満洲国期の日本による開拓移民の導入も国家が組織した移民の例と言えるだろう。

第三は、その北半のロシアのシベリア・極東とモンゴルにおける希薄な人口と相対的低開発、これに対する中国北部・東北部の巨大な人口と活力のある経済力のコントラストである。中国国内では、清代になって内地から東三省・モンゴルへの出稼ぎ労働の流れが存在した。また改革開放後の中国でも、移民の流れは絶えていない。にもかかわらず、中国は主にその東部の沿海部において経済発展を実現したものの、北方の内陸部の発展は相対的に遅れており、そのさらに北方に広がるロシア・シベリア・極東およびモンゴルは低開発のフロンティアでありつづけている。この経済的非対称性が国内及び国境を越えた人の移動を生み出す動因となっている。

第四に、この経済的非対称性とそれによって引き起こされる人や資本の移動が生み出す緊張の背後にある文化的な多様性の問題がある。

東北アジアの枠組みを歴史的過去に遡及させてみると、この地域の社会が、国家統治の一見したレジリエンスの一方で極めてコントラストの強い文化的差異を含んでいることがわかる。古来この地域では定着農耕民と遊牧民の二つの文化が相克を繰り返してきた。17 世紀に成立した大清国は両者を統合したものの、文化的差異は近代まで維持された。さらに同世紀その北に進出したロシアは、東北アジアにヨーロッパという全く異質な文化要素をもたらし、定着させた。このような文化的なコントラストの大きさは、東北アジア地域における人の移動をめぐる政治・経済構造を底辺において規定してきた。

東北アジアの広域の国家統治がもつ文化的コントラストは、域内の人の移動に対してホスト側社会の反発に「人種的」な色合いをそえる。ロシアにおける「中国人」や「イスラム教徒」、モンゴルにおける「中国人」は、ホスト社会の住民との文化要素の共有を望み得ない「他者」として意識されがちで、ホスト社会に強いゼノフォビアを生み出す。とは言いながら、一方で異質な文化をもつ人々とのデファクトな共生も、確実に実現されていくのである［堀江典生編 2010］。デファクトな共生の構造は、ゼノフォビアを解消しないまま、両者のせめぎ合いの中で不安定な課題として残り続けることになる。

東北アジアにおける人の移動は、国民国家を越えた越境移動という以上に、文化的多様性を内包する広域の帝国統治内部の文化的越境の経験を歴史的な基盤としてもっている。近代に入ってからも広域統治が維持されたために、この地域の越境移動に前近代の帝国統治の歴史が陰をおとす。ロシア帝政の民族統治をソ連が「少数民族」に対するアファーマティヴ・アクションに転換して引き継ぎ、さらにその解体後は現在のロシアが連邦国家としてこれを引き継いだ［マーチン 2011］。中国では、中華民国、そして中華人民共和国が、清朝から引き継いだ統治領域をそのまま近代的国民国家へ脱皮させようとした［坂元ひろ子 2002］。帝国的空間の国民国家への脱皮は、同化プロセスを不断に進行させたものの、依然多様性を維持する東北アジアが直面する難題

でありつづけている。帝国統治から国民国家への移行の試みがもつ構造的困難は、20 世紀前半のこの地域の混乱の要因の一つでもあった。この地域は近代国民国家の論理で語り尽くすことができない。「国民」の定義に伴う無理が解消されていないからである。シベリア・極東において「ロシア」とは、ヨーロッパからの様々な出自をもつ人々からなる概念であり、純粋にエスニックな概念ではない。ソ連が創出を試みたソヴィエト民族も、中国における 55 の少数民族と漢族を統合する人工的概念としての「中華民族」もそうである。そしてそのいずれにおいても、これらの概念を体現しているのは、エスニシティーである以上に国家なのである。ここでも我々は、東北アジアにおける人の移動を考える上での国家の存在を強く意識せざるを得ない。

鮮烈な文化的コントラストと大国の広域統治、それを国民国家へと脱皮させようとする統合努力、国家による辺境への移民の政策的導入、政治的・文化的境界を越えた人の移動が生み出す葛藤とデファクトな共生の構造、それが東北アジアにおける人の移動につきまとう構図なのである。従って、本書に収められた諸論文は、大なり小なり国家を意識しつつ論じたものとなっている。

本書の構成

本書では、このような東北アジア辺境部における人の移動の様態を、様々な角度と時期から考察した 9 編の論文を収録している。以下、対象とする時期により時系列的に内容を紹介したい。

岡洋樹論文「清朝中期におけるモンゴル人の人口流動性について」は、18 世紀のモンゴル地方におけるモンゴル人の移動を、とくに労働移民という観点から検討する。清朝は、内地諸省とモンゴル諸盟旗の間や盟旗相互における人の移動を禁じる「封禁政策」と呼ばれる政策を採っていたとされる。しかしすでに 18 世紀には、清朝の管理を越えた内地からモンゴルへの漢人の北上が進んだ。しかし当時の家畜窃盗事案審理に係る理藩院の上奏文から、漢人ばかりでなく、モンゴル人

も出稼ぎ、逃亡など様々な理由で所属旗から外出し、労働で生活を支えていたことが判明する。とくに帰化城、ドロンノール、東三省管下の諸城市は出稼ぎ目的や交易目的のモンゴル人が集まって来た。このような出稼ぎ労働による生存を可能とした経済的市場の形成は、荒武達朗が明らかにした東三省の状況とともに、19 世紀以後の東北アジア辺境における人の移動とデファクトな共生の基盤的条件を準備したといえる。漢人の進入によって形成された経済的基盤が、ホスト社会内部においても人の流動性を支えたのである。

サヴェリエフ論文「移民政策決定過程におけるロシア政府と総督管区の役割―沿アムール地方の東アジア移民受入政策を事例に（1884-1916）」は、清朝からロシアへ割譲された沿アムール州･沿海州開発のための中国人・朝鮮人導入政策の推移について論じている。これによると、新たに獲得された領土での開発において、ヨーロッパ・ロシアからの労働力調達は常に不足しており、国外からの中国人・朝鮮人・日本人労働力の導入が不可欠であった。とくに中国人労働力の調達は、山東からの労働移民に依存した。それゆえ現地当局による外国人の増大への警戒にも拘わらず、政策的な需要が存在する限り、移民の流入は続いたのである。サヴェリエフ論文は、ロシア極東では国家が移民の駆動要因となっていたことをよく示している。

橘誠論文「20 世紀初頭のモンゴル国における関税をめぐる相克と共生」は、1911 年に清朝から独立したモンゴルのボグド･ハーン政府期における関税をめぐる中国商人とロシア商人の動向を取り上げる。ボグド・ハーン政府は、漢人とロシア人に対する関税の課税取り決めを清朝から継承したが、政府やロシアの思惑とは異なり、ロシア人に対する無関税特権を利用して中国人とロシア人が共謀して税逃れを図った。モンゴルは､ロシアの帝国主義的な拡張政策を利用する形で清朝･中国からの分離独立を試みた。そこでは、漢人商業資本とロシア資本

とは本来対抗的な関係にあったはずである。しかし橋論文が示すのは、ロシアの帝国主義的進出の下で現出した中国人商人とロシア人商人とのデファクトな共生関係なのである。

藤原克美論文「満洲国下のチューリン商会における多民族共生」は、ロシア人商人チューリンが創立し、ハルビンで、百貨店を中心に多角的な経営を展開したチューリン商会の変遷を、商会の従業員の国籍分布を中心として検討し、満洲における多民族共生の一端を示している。チューリン商会は、白系ロシア人だけでなく、ドイツ人などのヨーロッパ人や、中国人が経営者・従業員として参加していた。亡命者社会として、時々の政治情勢の影響は大きかったが、多民族が暮らすハルビンの住民構成が鮮明に反映されており、共生の様態が日常的な生活の中で活写される。本来、コロニアルな環境の下で形成された東三省のロシア人コミュニティーは、革命によって国家の保護を失うことで、利権回収を目指す現地の軍閥や、日本の支配の下で状況に順応しつつ、ホスト社会に依存せざるをえなかった。優位さを失ったロシア人社会は、支配者の文化から、現地の多様な文化の一つとして適応することで共生を図ったのである。

中村篤志論文「遊牧と移住のあいだ：20 世紀前半期フルンボイル社会の動態から」は、現在の内モンゴル自治区東北部フルンボイル地方のバルガ人を対象に、20 世紀前半の政治的な変動の中で彼らが経験した越境移住の様態を、その社会組織たるアイマグの編成に視座を置きつつ考察したものである。バルガ・モンゴル人は、清代以来長距離の遊牧移動を行ってきたが、20 世紀に入り、外モンゴル・ボグド・ハーン政府の独立、フルンボイルでの争乱、第二次世界大戦終結に際して政治的秩序が動揺するたびに、外モンゴル・ハルハへの移住を行った。彼らは政治変動が生み出した亡命者ないし難民である。バルガの協働組織としてのアイマグは、こういった移動や、満洲国期の社会組織（ト

スゴン）編成の基盤となったという。バルガは、ハルハとともに 20 世紀初頭以来独立のための運動を展開したが、彼らが越えたのは、政治的な国際関係の中で同じ民族の間に生み出された国境である。このバルガの事例は、国境を越えて分布するいわゆる「跨境民族」の統合への希求が生み出す緊張と、共生のプロセスが直面する政治的な課題をよく示している。

井上治論文「地方文書に見る清末モンゴル西部のカザフ人」は、清末のモンゴル文文書史料から、モンゴル西部ホブド地方のオリアンハイやドゥルベドの住地に入り込んだカザフ人と、そのホスト社会との関係に関する情報を提示している。カザフ人も、ロシアと中国に跨がって居住する民族であった。この論文は、そのうち新疆のカザフ人の新疆側からホブド参贊大臣管下への移住が、移住先のオリアンハイ人住民との間にもめ事を引き起こしたり、受入側にもカザフ人を引き込むことにより利益を得ようとするものがいたことを明らかにしている。清朝統治下やボグド・ハーン政府期のモンゴルの統治秩序が、流動性の高いカザフ人の越境行動によって動揺を示した様子を知ることができるという点で興味深い事例だが、一方で、その過程で共生を図ろうとするホスト社会と移住者の動きを示す事例でもある。

広川佐保論文「近代モンゴルにおける漢人移住の歴史－「旅蒙商」、「労働者」から「蒙古帰僑」へ」は、モンゴル人民共和国（現モンゴル国）における華僑の動向を論じている。清代以来、モンゴルには旅蒙商と呼ばれる漢人商人が進出したが、モンゴル独立後の 20 世紀においても、モンゴル在住華僑の活動が見られた。1945 年には、中国に進撃したモンゴル人民共和国軍によって内モンゴルから中国人の拉致が行われた。中華人民共和国成立後は「援蒙事業」により中国人労働者がモンゴルに移住した。中ソ対立期には多くが帰国したが、残留するものも存在した。1983 年には、モンゴル政府が残留華僑の強制退去を実

施し、3 万人いたとされる華僑の数は激減した。帰国した華僑は中国政府により各地に配置された。モンゴル在住華僑の動向は従来ほとんど知られていないが、広川論文は、20 世紀東北アジアの国際政治に翻弄された移住者の運命をよく示す。

今村弘子論文「中朝の経済関係と中朝辺境の変遷」は、近年における北朝鮮の動向や中朝・露朝関係の変遷を整理しつつ、脱北者や辺境貿易の現状を論じる。北朝鮮の核開発はそれまでの中国との政治的・経済的関係を冷却化させた。両国の関係がやや回復したかにみえる今も、経済的には国境を接する地域での小規模な貿易に留まっているようすが紹介されている。北朝鮮は、権威主義的な体制を維持しようとし、核開発を進める同国に対する国際社会の制裁下にあり、国家による人や物の移動への制約が極度に高い事例である。「グローバル」時代における人の越境移動に関心がとらわれがちな我々にとって、現在でも国家の存在が際立ちうる事例として興味深い。

堀江典生論文「ロシア東部のルイナックにみるエスノランドスケープ：中国的なるものの進化」は、シベリアの都市イルクーツクとノヴォシビルスクの「ルイナック」と呼ばれる市場に見られる「中国的なもの chineseness」のホスト社会の中での位置を論じる。市場経済への移行期において、中国からの担ぎ屋貿易商が開いた市場が、行政当局による排除の対象となりながらも、経済困難に直面したロシア市民の需要を満たしたこと、当局による市場閉鎖後は中国的なイメージを残しながらも、中央アジア諸国から来た商人などを含む多様なマルチランドスケープとして定着していく様が明らかにされる。当初の中国イメージに対する嫌悪感と中国商品に対する市民の需要が交錯するなかで、「中国的なもの」が市民権を得ていく様は、18 世紀のモンゴルや 19 世紀末の極東で見られた現象にも通じる。堀江論文は、ホスト社会の中で、緊張を孕みつつデファクトに形成されていく共生の構造を

よく示している。

総じて、17 世紀以後の東北アジア辺境において、国家統治の影で移民の流れは確固として存在してきたと言える。人口希薄な辺境部への人口稠密な地帯、とくに中国内地北部諸省からの人の流れはその主旋律である。この流れは、清代以来、20 世紀の動乱をはさんで、現在もなお続いている。さらに中国の経済発展は、周辺部からの労働力流入も増大させている。東北アジア内陸辺境の開発は、移民の労働力に大きく依存しつづけてきたのである。

この移民の流れにたいして、国家は常に敵対的だったわけではない。清朝のいわゆる「封禁政策」は甚だ不徹底なものだったし、労働力が不足する辺境部への移民の導入は、しばしば国家政策としても実施された。それは中国東北部やモンゴルなどとの行政的・文化的境界を越えて進んだ。20 世紀になると、中国はむしろ植民政策を基本とした。日本による満洲国の建国も、この流れを止めるものではなかった。

20 世紀東北アジアに成立した社会主義体制は、ポジティブな意味でも、ネガティブな意味でも人の移動に大きな影響を与えたと言える。この時代、権力が囚人労働や強制移住・追放などによる人の移動をオーケストレイトした。そのような中でも、移住先でのホスト社会への順応や共生は不可避であった。ソ連圏社会主義体制の解体と中国の経済発展は、再び人と物の流れを活性化し、越境者とホスト社会の間に緊張を孕んだ共生の構造が生み出されている。そこでの国家の役割はいまだ大きいが、人の移動も活性化している。そこに東北アジアの地域構造の特色の一端を見ることができるのである。

本書は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (A)「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的･現在的研究」（研究課題／領域番号 23251003）および基盤研究 (B)「東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理：中露・蒙中辺境に着目して」（研

究課題／領域番号 15H03128）による成果の一部である。またプロジェクトの中で実施されたシンポジウムでは、人間文化機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」の支援を得ており、本研究は同事業の成果でもある。

参考文献

赤尾光春・早尾貴紀編
2009『ディアスポラから世界を読む　離散を架橋するために』東京：明石書店
赤羽恒雄、アンナ・ワシリエバ編
2006『国境を越える人々　北東アジアにおける人口移動』東京：国際書院
荒武達朗
2008『近代満洲の開発と移民――渤海を渡った人びと――』東京：汲古書院
伊豫谷登士翁
2001『グローバリゼーションと移民』東京：有信堂高文社
2007『移動から場所を問う　現代移民研究の課題』東京；有信堂高文社
宇野重昭、増田祐司編
2000『北東アジア地域研究序説』東京：国際書院
2002a『北東アジア世界の形成と展開』東京：日本評論社
2002b『21世紀北東アジアの地域発展』東京：日本評論社
宇野重昭、小林博編
2009『北東アジア地域協力の可能性』東京：国際書院
サヴェリエフ、イゴリ
2005『移民と国家　極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民』東京：お茶の水書房

岡洋樹、境田清隆、佐々木史郎編
2009『朝倉世界地理講座：大地と人間の物語 2　東北アジア』東京：朝倉書店
坂元ひろ子
2002「多民族国家におけるナショナル・アイデンティティの歴程——大漢族／黄種／中華民族」『アジア新世紀 3　アイデンティティ　解体と再構築』47-70、東京：岩波書店
杉原薫
1999「近代世界システムと人間の移動」樺山紘一ほか編『岩波講座世界歴史19移動と移民　地域を結ぶダイナミズム』3-61、東京：岩波書店
堀江典生編
2010『現代中央アジア・ロシア移民論』東京：ミネルヴァ書房
マーチン、テリー（荒井幸康ほか訳）
2011『アファーマティヴ・アクションの帝国　ソ連の民族とナショナリズム、1923〜1939年』東京：明石書店